

## グレートバリアリーフクルーズ <ポンツーン> へ

**5月24日(日)** 今日、グレートバリアリーフを訪ねる日だ。ケアンズ沖の約2,000 kmにわたって連なるサンゴ礁には、エメラルドブルーの海に無数の美しい島々が浮かぶ。

10:00に、13名一行がホテルから徒歩5分ほどの波止場に向かう。10:30波止場を出発。アウトリーフ(沖合のサンゴ礁)へは、ツアー会社が催行するクルーズツアーで行く。高速船カタマラン(双胴船)に、酔い止め薬を飲んで乗船した。船は、猛スピードで、まず、グリーン島に立ち寄り、そのままグレートバリアリーフ目指して突き進んだ。

12:30には、ポンツーン(固定型の海上デッキ)に到着。90分のすごい船旅だった。すぐ、半潜水艦ともいべき海底観測船で海底のサンゴ礁や熱帯魚を観賞。

13:00には、昼食にカレーライスが出た。ビールも格別の味だった。乗客のうち、若者たちはシュノーケリングを楽しんだり、水中バイクに乗ったりしていた。私もシュノーケリングくらいは試してみようと思ったが、万一のことを考えて差し控えた。

15:30には、ポンツーンを離れ、また、高速船で突っ走り、17:00にケアンズ港へ戻った。



海底観測船でサンゴを見る



白波を立てるサンゴ礁



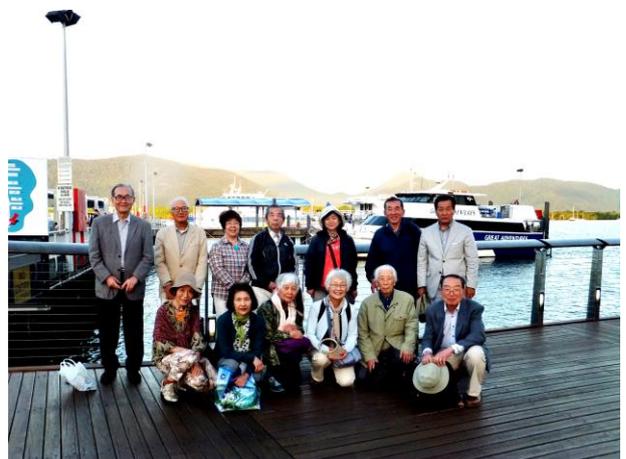
カタマランにて



シュノーケリングをする若者達



ポンツーン(海上デッキ)に到着



クルーズを終えて(ケアンズ港)

19:30 夕食のディナー エアーズロック組の4名を交え、17名全員揃って、ホテル近くのシャングリラホテルのテラスでジャパニーズフレンチを賞味。4日間のオーストラリア旅行の最後の晩餐だった。

ホテルに帰り、団長以下、有志でささやかな反省会を行った。

### エアーズロック（オプショナルツアー4名参加）

（以下、坂本奈美枝 記）

海外支部歴訪の旅に参加するのは6年前のエジプトについて2回目である。オーストラリアのほぼ中央に位置し「地球のへそ」とも言われるエアーズロック、面積の70%が砂漠で、その中に出現した巨大な一枚岩をこの目で見たいと思った。

### 5月23日(土) 晴れのち曇り

朝全員で空港に向かい、我々エアーズロック組はケアンズ組と別れ、9:50 発 QF790 便に搭乗。途中アリスプリングで乗り換えエアーズロック着14:50分。

当ツアーの参加者は門馬前関西支部幹事長以下4名。到着後直ちにバスでウルル・カタジュタ国立公園に向かう。ウルルとは先住民アボリジニの言葉でエアーズロックのことである。エアーズロック (Ayers Rock) の名称はこの地の探検家を支援した Henry Ayers から取られた。

### ウルル・カタジュタ国立公園

東京都の半分を超す面積を有する国立公園の中に存在する奇岩とアナンク族(ウルルに住む先住民)の壁画など価値ある文化が世界遺産に登録されている。鉄分を含む大地は辺り一面赤茶色を呈している。



カタジュタ全景

### カタジュタ・ウォルバ渓谷散策

大小 36 個の奇岩群であるカタジュタはウルルと並びもう一つの世界遺産である。アボリジニの言葉でカタはたくさん、ジュタは頭の意味で、彼らは1, 2, 3より大きい数は全てカタというとか。最も高い所は546m, 周囲35kmは山手線一周とほぼ同じ距離である。

ウルル・カタジュター帯ははえが多く、頭からすっぽりかぶる虫除けネットの所持が望ましいと旅行書にあった。この地に足を踏み入れると、絶えずはえが顔面めがけて襲ってくる。開いた口の中にも飛び込む勢いである。人の汗の臭いに誘われるのか夏場は特にひどいそうである。あの辺りは牛の飼育が盛んであるからとガイドから説明があった。

ごつごつした坂を登り渓谷を目指す。靴やズボンの裾がみるみるうちに赤茶色に染まる。3, 40分で麓に到着。岩山の巨大さに言葉を飲む。正面に4つの巨大な岩山がそそり立ち、2番目と3番目の岩の間が深く、深く浸食され、美しいV字を形作っている。砂漠と言っても思いの外植物が多く、道に沿ってブッシュが連なり、ユーカリの葉も茂っている。厳しい自然環境の中で生息し続けるための自然現象であろう、中でも固く細く変形したとげ状の葉っぱをもつ白い植物はハリネズミの背中のようなのだ。



カタジュタウォルバ渓谷

エアーズロックと言えば象徴的なあの一枚岩だけとばかりと思っていたが、それに勝るとも劣らない雄大なカタジュタを鑑賞出来たことは大層驚きであり、又、何か得をした思いであった。

## ウルルサンセットツアー

溪谷散策を終え、ウルルサンセットツアー会場に移る。セットされたテーブルでスパークリングワインを片手に、カナッペ、スティック野菜をつまみながら日没を待つ。日の入り、6時6分。太陽が沈み始めると赤紫色の岩肌が徐々に黒みがかった紫色に変わる姿を鑑賞した。やがてウルルは漆黒の闇に消えた。



ウルル サンセット



ウルル サンライズ

## BBQディナーと星空の解説

BBQ会場ではオージービーフ、ウインナーの定番に加え、カンガルーの肉が供された。小さいのを一口トライしたが堅くてくせがあり、ノーサンキュー。期待した南十字星と天の川は生憎雲が厚く全く見えない。残念！

## ウルルサンライズツアー

**5月24日(日)** うす曇り

朝6時前、真っ暗闇の中、サンライズ会場でおートミル、牛乳、チーズ、紅茶の朝食弁当を食べる。周囲が少しずつ明るくなって近くの展望台に向かう。黒く浮かび上がったウルルのシルエットが次第に紫色を帯びてくる。朝日を浴びてウルル全景がオレンジ色に染まる光景が残念ながら見られない。が、一瞬、雲の裂け目から顔を出した太陽光で山の一部分が帯状に真っ赤に染まる美しい姿が見られた。

## ウルル登山

ウルルは高さ348m、周囲9.4km、東京タワーより高く外周は皇居の約2倍。海水の浸食そして隆起により現在の形となった砂岩の一枚岩で、中に含まれる鉄分の酸化により、独特の赤みを帯びる。地表部分は全体のたった1/3に過ぎないとか。

バスでウルル登山口に移動。山の急斜面に張られた鎖道辺りに人影はない。入り口に「頂上付近強風のため登山不可」の看板。強風、高温などの気候条件、儀式挙行などで登山が制限されるのは度々とか。

往復約2時間の登山をあきらめ麓の散策へ。(ウルルを聖地として崇める先住民は観光客の登山を好ましく思っていない。)



ウルル登山口にて

## ウルルクニヤウオーク散策

ガイド嬢の案内で約3時間の散策に出発。

- ・岩肌に残る蛇が這ったような浸食痕から生まれたニシキヘビクニヤと毒蛇リルの先住民の言い伝え。
- ・降った雨は岩肌を伝って流れ落ち窪みにたまり、泉のような水場を作る。ここから見上げると岩肌にくっきりとハートの窪みが見える。見つけると幸せを招くという”幸せのハート”。若いカップルのお目当ての観光スポットの一つとか。ウルルの心臓とも言われる。
- ・アナング族の壁画 とごろを巻くニシキヘビの頭をした岩が泉を見張る形でせり出している。その下の洞窟の壁面いっばいに色々の図柄の壁画が描かれている。文字を持たないアナング族が伝達の手段で用い、中には現在でも使われている模様があるという。



幸せのハートマーク



壁画

- ・アカシアの木々の中を通り抜けて歩くといくつかの洞窟に着く。女性や子供が調理をした平たいまな板岩が残る洞窟、儀式に参加できない長老が座り、女、子供が儀式エリアに入らないように監視した洞窟など、それぞれが興味深かった。
- ・落差90mのカンジュの滝は特に圧巻で、垂直に落下する水跡を黒く岩肌に残している。



カンジュの滝で

遠くから眺めるウルルは巨大の一枚岩であるが、実は大小の起伏、風雨による浸食痕を残すデコボコした岩であることを再認識した。

巨大な自然の造形物に圧倒されつつ、その一部となった人間を感じ、数万年に渡りこの地に生活してきたアナング族の文化に触れ、彼らの声に耳を傾ける二日間であった。

ホテルに戻り、昼食に特大のオージービーフバーガーを食し、ケアンズ組と合流するため15:25発QF1854便でケアンズ空港に向かった。

### **無事帰国 ～ オーストラリアは広かった！ ～**

**5月25日(月)** エアーズロックの4人を加え、17名そろって9:50にホテルを出発し、ケアンズ空港に向かった。

12:20 ケアンズ発 JQ025 便にて出発

18:45 成田着 JQ025 便はジェットスター就航11周年ということで、乗客全員に「記念品」が贈られた。

6時間半のフライトだったが、割合空いており、全員、無事帰国した。

海外支部との交流、広大なオーストラリア大陸の観光、そして同窓という仲間の絆を強めた有意義な旅行であった。再会を祈念して家路についた。お疲れ様でした。

記述 シドニー・ケアンズ：林義之  
エアーズロック：坂本奈美枝